

# 香港におけるインターンシップの位置づけと実態

## 香港大学教育学部図書館・情報管理学プログラムの事例

佐藤 真実子（立教大学教育研究コーディネーター）

### 1. はじめに

立教大学司書課程では、必修科目である図書館実習において、2016年度より国外での実習を香港聖公會明華神學院図書館にてスタートさせた。さらに、本課程では「図書館実習のあり方検討プロジェクト」として、諸外国の図書館専門職養成におけるインターンシップの位置づけ、実態に関する調査も開始することとなった。このような中で、調査対象地として、筆者は、本課程初の国外実習が実現された香港を選択した。本調査では、香港大学教育学部の図書館・情報管理学（Science in Library and Information Management）プログラムのインターンシップに焦点を当てながら、実地調査に基づき、大学での科目運営と、各受け入れ機関の対応と実務内容等について把握することを目指した。

### 2. 調査方法の概要

2016年11月13日（日）から20日（日）にかけて香港に滞在し、まず初めに、香港大学教育学部にて図書館・情報管理学プログラムの Dickson Chiu 講師に、同プログラムにおけるインターンシップの位置づけとその運営、学生への指導等についてインタビューを行った（fig. 1）。その後、Chiu 講師の紹介により、同プログラムの学生のインターンシップ機関を訪問し、担当者に、インタビュー調査を行った。今回、インターンシップ機関として調査を行ったのは、香港大学図書館（The University of Hong Kong Libraries）、香港大学アーカイヴズ（The University of Hong Kong Archives）、香港大学美術博物館（University Museum and Art Gallery, The University of Hong Kong）、弘立書院小學部課程図書館（The ISF Academy, Primary School Library）といった、香港大学内施設を中心とした四つの機関である。

これらの機関のインターンシップ担当者には、インターンシップの時期と期間、インターンの選考の基準、一年あたりの受け入れ数、インターンの大学での専攻、実務作業の内容とその調整方法、インターンの評価方法等に関する主な質問事項について、事前にメールで伝え、実地調査では、その質問に沿ってインタビューを行った。なお、その際、香港大学の学生に限らず、インターンシップ全体についての状況を聞いた。



fig. 1 香港大学 University Street と校舎を望む  
（以下、写真はすべて筆者が撮影）

### 3. 香港大学教育学部図書館・情報管理学プログラムにおけるインターンシップの運営

香港大学教育学部では、香港図書館協会（Hong Kong Library Association）の指定する図書館専門職養成の最上位にあたる学位プログラム（Degree Programmes）を展開し<sup>1)</sup>、情報管理学の学士号（Bachelor of Science in Information Management）<sup>2)</sup>と図書館・

情報管理学の修士号 (Master of Science in Library and Information Management) を取得できるプログラムを開講している<sup>3)</sup>。特に近年、修士課程のカリキュラムには新しい部門を設置し、現在は、図書館学 (Librarianship)、情報管理 (Information Management)、知識管理 (Knowledge Management)、アーカイヴズ・記録管理 (Archives and Records Management)、データ科学 (Data Science) の五つの部門となっている。学士、修士のいずれのプログラムのカリキュラムも、どのジャンルの施設にも適用できるよう情報管理に重点が置かれているという。

Chiu 講師へのインタビューは、11月14日(月)の10時15分より、Chiu 講師の研究室 (Runme Shaw Building) にて行い、インタビュー終了後は大学図書館を案内してもらった。

年によって増減があるものの、学士課程学生は約100名、修士課程学生では正規コース生50名、夜間コース生25名がこれらのプログラムを受講している。インターンシップは、学士課程では必修科目の「職業体験 (Professional Experience)」、修士課程では選択科目の「図書館・情報管理インターンシップ (Internship in Library and Information Management)」にあたり、一年あたり学士課程学生50名、修士課程学生25名の計75名ほどが実際にインターンシップに参加する。時期は5月から8月にかけて行われ、160時間程度、2、3ヶ月の勤務を推奨しているが、概ね学士課程学生はそれに近い期間、時間の限られた修士課程学生は1、2ヶ月程度になるという。インターンシップ機関としては、図書館に限らず、アーカイヴズ等を含めて幅広い視点で提案している。受け入れ先には香港以外の機関も含まれ、中国本土、台湾を中心に、その他、シンガポール、また、数は少ないが、カナダ、アメリカへ行く学生もいる<sup>4)</sup>。

原則として、インターンシップの前年の11月頃から事前指導を開始し、概要説明、申込書類の書き方等のレクチャーを行い、3月に募集情報の発表、過去のインターンシップ生の体験発表、応募書類の作成と提出を行い、4月には応募機関との面接、5月上旬頃に受け入れ先決定、6月頃から順次、インターンシップ開始、1週間以内に学習契約書を提出、インターンシップ終了後の9月初旬にレポート等を提出という流れになる。学生の書類提出や教職員との連絡は、ムードル (Moodle) というオンライン学習管理システムやメールで行われる<sup>5)</sup>。インターンシップ期間中に1、2度、担当教員は各学生の訪問指導を行い、その際の勤務態度と終了後のレポートを評価基準とする。応募から終了後までのほとんどの手続きは助手、事務職員が行い、Chiu 講師は全体の管理を行っている。受け入れ機関が決定しない学生がいる場合は、以前から懇意にしている機関に交渉をして、受け入れ先を確保する。インターンシップの内容、勤務する部署等はすべて、それぞれの機関にほぼ一任している。

Chiu 講師によれば、インターンシップは、学生と受け入れ機関双方にとって有益な科目だという。すなわち、各機関は情報管理の知識を要する業務の人手を確保することができ、学生を通して情報管理の最新の動向を得られる。また、学生は、就職のための職務経験を積むことはもちろん、大学で学ぶ理論と現場の実務との相違をしっかりと認識できるようになる。

#### 4. 各機関でのインターンシップ受け入れの状況

##### a. 香港大学図書館 (The University of Hong Kong Libraries)

1912年開館の香港大学図書館は、中央図書館と六つの分館からなり、現在の蔵書は紙書籍300万点に加え、460万点の電子書籍、その他、24万点を超えるオンライン・ジャーナルにまで及ぶ。また、香港の歴史と生活に関する資料をはじめとする特別コレクションに基

づいたデジタル・アーカイブを構築し、オンラインでの公開を行っている。さらに、2012年、学士課程カリキュラムが4年制へ変更になったことから<sup>6)</sup>、中央図書館は学生数の増加を見込んで大規模改修を行い、4階には新たに”Level 3”と呼ばれる学修支援に重点を置いたラーニング・コモンスが誕生した (fig. 2)。

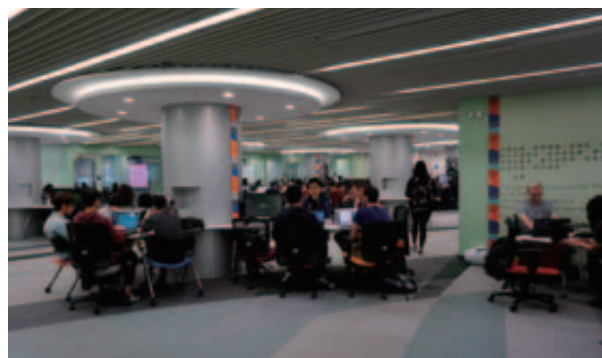


fig. 2 香港大学中央図書館 Level 3  
コラボレーション・ゾーン

中央図書館の貸出サービス課の Associate Librarian である Esther Woo 氏、全分館の図書館サービス課長であり

自身は法律司書である Irene Shieh 氏、保存・修復課長の Jody Beenk 氏が、それぞれの課におけるインターンシップの状況についてインタビューに応じてくれ、11月14日(月)14時30分より16時30分頃まで、中央図書館の会議室にて話を聞いた。

香港大学図書館でのインターンシップは、通常、夏に行われるため、3月から4月にかけて募集が開始される。以前は年に20名と上限を決め、館の職員が時期の調整から実務の対応までを行い、負担が大きかったため、香港大学の生涯教育を専門とする附属機関の香港大学專業進修学院 (HKU SPACE)<sup>7)</sup>へ、数年前から調整を依頼するようになった。それ以来、時期は夏のみ限定し、人数も10～20名程度と幅を持たせ、できるだけ抑えるようにしている。

インターンシップの募集対象は、原則として、学士号取得者以上、できれば修士課程在籍者で、図書館・情報管理学の基礎知識を習得した者である。選考は履歴書、レポート等による書類審査のみだが、稀に書類だけでは不安な要素が残る場合などは、担当者の意向に応じて面接を行う場合もある。Shieh氏は、各分野に特化した分館であっても、実務上は、図書館・情報管理学の基礎知識以外の専門知識は特に必要ではないという。しかし、Beenk氏によれば、保存・修復課では実際に貴重資料を扱う作業を伴うことから、注意を要する作業ができるかどうかを確認するときもある。3人のいずれも、選考においては、強い関心を持つテーマがあるかどうか最も重要な基準になると述べていた。

インターンの専攻は、図書館・情報管理学が大半を占めるが、他にも、サイエンス、アート、ビジネス等もみられる。また、学内だけでなく他大学や、数は少ないがベルギーなど海外からの学生を受け入れた実績もある。

実務の内容は、すべて図書館サイドで決め、その時に受け入れ可能な一つか二つの部署で作業を行う。大学が指定しているとおおり、勤務時間数は160時間程度であり、分館に勤務の際は、1週間半ずつ4館で勤務してもらう場合もある。特に分館では、購入作業ができないため、必然的に購入以外の業務(サービス、システム、目録など)となり、その中でも、リサーチ・サポート、図書館間での貸借、照会、館内での講演会の運営等、できるだけ職員の指導がなくても進められる作業を提供している。中央図書館では、通常業務の他に、それほど重要ではない案件の場合に限り、館内会議に同席してもらうこともある。一方、保存・修復課の場合は、修復作業の見学や、書籍や資料に劣化や損傷が生じる原因のレクチャーを行いながら、プロジェクトに取り組んでもらうが、貴重資料に直接影響を及ぼす可能性もあるため、必ずサポートが必要となり、他課のように、インターンにすべて任せる作業の提案は難しい。

終了後は、インターンが所属する大学等の担当教員に向けて評価表を作成したり、修了証

明書を発行したりするが、大学によってフォーマットや評価項目は異なる。

## b. 香港大学アーカイヴズ (The University of Hong Kong Archives)

香港大学アーカイヴズは中央図書館新館 2 階の一角にあり、比較的小さな面積に、収蔵スペースの一部とオフィスが配されている (fig. 3)。散逸の可能性があった大学史に関する記録資料に関して、2003 年にアーカイヴズ・ワーキング・グループが発足して以降、次第に整備が進められ、2006 年夏に初の専門のアーキビストが採用され、同時に現在のスペースに「一時的な」居を構えた形となる。ファイル、写真、出版物、録音資料、電子ファイルなど多岐に渡る膨大なコレクションにより、2009 年には収蔵スペースが飽和



fig. 3 香港大学アーカイヴズ

状態となり、学外に収蔵場所を設けるなどして対処しているが、将来的には同じ館内の新しい場所への移動を予定しており、閲覧室や展示スペースを備えることを希望している<sup>8)</sup>。

インタビューには、ともに専門のアーキビストである室長の Stacy Lee 氏と収蔵資料管理担当の Anna MaCormick 氏が応じてくれ、Lee 氏とは 11 月 17 日 (木) の 16 時から 17 時すぎまで、MaCormick 氏とは翌 18 日 (金) 10 時 30 分から 11 時 30 分頃まで、ともに、アーカイヴズのオフィスで話してくれた。

通常、インターンは、毎年夏に、平均 2 名を受け入れている。限られたスペースゆえ、収蔵資料の整理作業といったコレクション管理や記録管理の実務を行うには、多数のインターンの受け入れは困難である。アーカイヴズとしては、インターンシップにはやや長い期間が必要であると考えため、週 15 ~ 20 時間で、少なくとも 6 週間、希望としては 2、3 ヶ月の勤務が望ましい。短期間では、コレクションの整理作業などの重要かつ詳細な情報を、限られた時間に詰め込むことになり、超過勤務をしないかぎり、その知識の応用や実務を十分に学ぶことはできない。ここでは、インターンシップは雇用とみなし、インターンには、通常、時給 10 ~ 15USD (専門職であるアーキビストの初任給の約半額) 程度の給与が支払われる。

インターンの応募の方法は、応募者自身や指導教員から直接打診があるケースがほとんどである。受け入れるのは、やはり学士号取得者以上、修士課程在籍者である。室長の Lee 氏、またはアーカイヴズの代表連絡先に最初の打診があり、その後、MaCormick 氏がそれぞれに連絡をとり、書類審査、志望動機や学びたいことを確認するインフォーマルな面接などの具体的な手続きを進める。面接では特に、探求心と問題解決能力の二点に注目する。インターンの専攻は、図書館・情報管理学よりも、歴史学の方が多く、その他には教育学などさまざま、過去には美術専攻の学生の応募もあった。学内の図書館・情報管理学プログラムにアーカイヴズ・記録管理部門ができたため、今後はそこからの学生も増えることを期待している。

MaCormick 氏によれば、インターンには、基本的に日常業務に加わってもらう形をとるが、実際の職員の日常業務とは少し異なり、コレクションの整理やデータベースへの情報入力等、インターンそれぞれが期間中に自分自身で完成させることができるレベルや分量であり、かつ、退屈でなく少しでも興味を持てるようなプロジェクトを提案するように努めてい

る。最初は、資料の取り出し方やしまい方について、バインダーへの挟み方や保存箱に重ねる順番、状態の確認やすべての資料があるかどうかのチェックなどの基本的な作業内容と手順を教える。アーカイヴズのコレクションは香港大学に関する資料が主であり、テーマの範囲が狭く必ずしもインターンの専攻に合わせたプロジェクトを用意できるわけではないため、たとえば、関心を持ちやすそうな、歴代の教授の個人記録や登録名簿といった資料を任せるなどする。

アーカイヴズでのインターンシップは、スペースの問題などもあり、公式に募集をしているわけではなく、非公式の極めて小規模なものであるため、インターンについての評価表などは、依頼があるときのみ作成するが、それ以外は特に発行はしていない。将来的には正式に公募する形をとりたいと思っている。

### c. 香港大学美術博物館 (University Museum and Art Gallery, The University of Hong Kong)

香港大学美術博物館は、馮平山博物館 (Fung Ping Shan Museum) として1953年に開館したが<sup>9)</sup>、1994年に現在の名称に改称し、その2年後に一般公開されるようになった (fig. 4)。開館以来継続して運営されている博物館としては、香港で最も古く、60年を超える年月の間に、明朝から現代にかけての絵画作品だけでなく、新石器時代から清朝にかけての陶磁器や青銅器といった幅広い中国美術のコレクションを築いてきた。



fig. 4 香港大学美術博物館

インタビューには、館長であり、美術学部の名誉准教授でもある Florian Knothe 氏が自ら応じてくれ、11月15日(火)の15時から16時30分頃まで、美術博物館内の館長室で話を聞いた。香港大学美術博物館には2種類のインターンシップ・プログラムがある。一つ目は、学内の学生を対象としたもので、インターンシップが単位として加算される。1学期に2、3名を受け入れるが、そのほとんどが美術学部の学生であり、学士課程を終え修士課程に入る前の学生や修士課程在籍者などが多く、学士課程の学生の受け入れは難しい。二つ目は、誰でも応募できるもので、社会人や海外の学生を受け入れたことがある。主に6月から8月の夏の期間に、3、4名が、4～8週間のインターンシップを行う。過去に受け入れたベルギーの学生は大学図書館の保存・修復課と共同で受け入れた。

インターンの応募、受け入れ、採用に関するさまざまなやりとりは、事務スタッフに関わることもあるが、基本的には館長自らがすべて直接本人と行っている。選考は、主に履歴書等の応募書類による書類審査で行うが、願わくば、一度または二度程度の実務経験や、出版物の業績があるとよい。インターンにとってはもちろん、美術博物館にとっても益のあるプログラムになるかどうかを判断して選考している。

香港大学の図書館・情報管理学プログラムの学生は、ほぼ毎年1名参加している。美術博物館内には、敢えて規模を広げず、コレクションの関連図書にテーマを絞った小さな図書館がある。この図書館の司書は、同じ図書館・情報管理学プログラムの出身のため、インターンの希望をある程度予想することができ、それに基づいて、目録等の基本的な作業をはじめとした小規模館ならではのあらゆる作業をインターンに担当してもらっている。その他のインターンに

ついても、学芸員、保存・修復家、コミュニケーター、司書といったそれぞれの関心に合った職種の部署に配属され、特別なプログラムを考えることはせず、日常業務、進行中のプロジェクト等の業務に携わる。それが、まさに仕事の「現場」を経験する「学習体験」となる。少人数ゆえ常に部署を超えた協力体制にあるため、配属先の職員とはもちろん、それ以外の部署のメンバーとも、インターンは関係を構築することができる。選考の際にある程度の即戦力を期待してしまうのは、実際のところ、インターンは館にとっての重要な人手であるためである。

インターンシップの評価は、香港大学の美術学部の学生には修了証を発行し、図書館・情報学プログラムの学生には指定されたフォーマットの評価表に記入をする。一方、香港大学以外から広く募集する夏のインターンに関しては、原則として、評価は行わない。

#### d. 弘立書院小學部課程図書館 (The ISF Academy, Primary School Library)

IT企業のオフィスや高級住宅の高層ビル群から成る、海を望むサイバー・ポートというエリアに位置する弘立書院は、独自の教育方針によって運営される非営利の私立のインターナショナル・スクールである。2003年開校と新しく、2012年には初めて中學部課程最終学年の生徒が卒業を迎え、また、2015年には幼稚園も開園した。英語に加えて中国の公用語である普通話の2言語で授業が行われ、同時に二つの文化を学ぶイマージョン教育が採用されている。

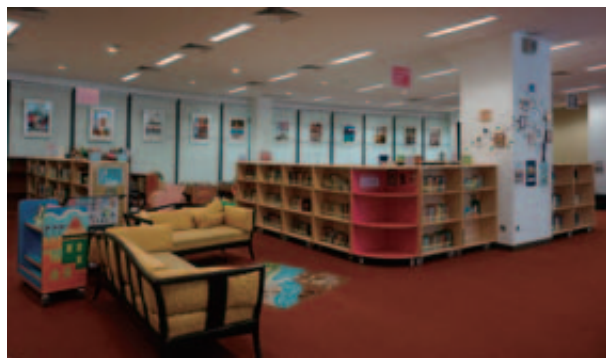


fig. 5 弘立書院小學部課程図書館

インタビューには、小學部課程図書館長の Karen Ip 氏が応じてくれ、11月16日(水)の午前10時から12時頃まで、図書館内のオフィスで話を聞いた。司書教諭である Ip 氏は、香港學校図書館主任協会 (Hong Kong Teacher-Librarian's Association) の会長でもあり、香港に限らず、中国政府の學校図書館設立・拡大に向けての司書教諭研修プログラム等にも積極的に関わっている。小學部課程図書館は2014年に改修し面積を広げたため、現在では、香港の小学校の中で最も大きい図書館となり、スペースだけでなく、設備、蔵書、スタッフのいずれにおいても非常に恵まれた施設である (fig. 5)<sup>10)</sup>。両言語の図書割合は、英語が30%、普通話が70%である<sup>11)</sup>。また、電子書籍のコレクションも導入され、今後さらなる拡大を目指しているという。

インターンシップには2種類あり、一つは、半年から一年の期間行われる教員養成のためのインターンシップ、もう一つは、ライブラリアンとライブラリー・アシスタント養成のためのインターンシップであり、ともに、大学教員等の推薦により、Ip 氏宛にメールで直接受け入れの打診がある。年に最大6名を受け入れているが、本来は4名までが理想で、同時期に受け入れられるのは2名程度である。弘立書院の夏休みは他校より早い6月中旬から始まるため、必然的にそれ以降の夏の時期は受け入れが難しくなる。インターンの選考では、何を学びたいのかという各学生の希望が重要なポイントとなり、将来の仕事に役立つような職務経験となるよう Ip 氏も努めているという。

作業内容については、インターンシップの最初に、選考の基準となった「インターンが学びたいこと」を再度確認し、期間中のスケジュールを相談の上、本人が希望するものに応じて、それぞれの作業を割り当てていく。修士課程の学生の場合は、各自の研究の助けとなる

ような内容を、学士課程の学生の場合は、司書補としての実務を中心とした日常業務のプログラムを提案する。

インターンシップ終了後の評価は、各学生の目的や所属によって要求されるものが異なる。香港大学の場合は、他の機関と同様、Ip氏は複数のチェック項目が書かれた評価表に記入をする。

## 6. 大学におけるインターンシップ運営と受け入れ機関の実態

今回の実地調査により、香港大学教育学部の情報管理学学士プログラム、図書館・情報管理学修士プログラムにおけるインターンシップの位置づけとその運営方法を把握することができた。全受講者のうち学士プログラムでは約50%、修士プログラムでは約30%の学生がインターンシップに参加しており、合わせて75名という多数の学生を各機関へ送り出している。大部分の学生が6月から8月の夏の期間に、学士課程学生は2、3ヶ月、修士課程学生は1、2ヶ月をかけて、合計160時間程度の勤務を行う。前年の11月頃からスタートする事前指導をはじめ、募集情報の収集や受け入れ先への打診、学生から提出された応募書類の処理、各機関への訪問指導、さらには、事後の学生のレポート、受け入れ先からの評価表に基づく成績評価に至るまでのインターンシップの全体運営では、コーディネートをを行う担当教職員の相当な労力がうかがえる。連絡はメールを用い、提出物にはムードル(Moodle)というオンライン学習管理システムを用いるのも、作業の煩雑さや負担を少しでも軽減するためと思われる。また、運営側にとっては、参加学生の増加により受け入れ先の確保が問題となるが、特に、修士課程での専門部門増設などのように情報管理に重点を置くことにより、図書館以外のより幅広い種類の機関での受け入れが可能となるため、インターンシップ先は順調に確保されているように見受けられた。このインターンシップで大学が期待することは、単に就職のための職務経験を積むことだけでなく、学生自身が大学で学ぶ理論と現場の実務との相違をしっかりと把握することであった。

このような大学の意向を受けて、今回調査を行ったほとんどの受け入れ機関では、概ね大学のスケジュールと同じく、6月から8月の夏の期間に1、2ヶ月の受け入れを行っていた。しかし、弘立書院のような学校図書館では夏休み期間は完全に休校となるため、それ以外の学期中を受け入れ時期としていた。一年あたりの受け入れ数は、香港大学図書館のように分館を有し多くの部署からなる図書館の場合は、20名程度までを各部署に振り分けて受け入れているが、香港大学美術博物館や弘立書院のように、募集対象が異なる複数のインターンシップを実施している場合は、合計で6、7名程度を受け入れていた。また、組織自体が小規模で非常に限られたスペースしか持たない香港大学アーカイヴズでは、2名を受け入れるので精一杯という状況であった。

四つの機関での募集対象者は、修士課程在籍者をはじめとする学士号取得者以上であり、さらに香港大学美術博物館では、別の機関での実務経験や論文執筆などの業績があると望ましいというスタンスであった。一方、弘立書院では、学士号がなくても取得可能であるライブラリー・アシスタント資格のためのインターンシップも行うため、中等教育修了者も受け入れていた。申し込みをはじめとした諸手続きについて、受け入れ人数の多い香港大学図書館では、インターンシップに関連する膨大な事務手続きを数年前から香港大学専業進修学院(HKU SPACE)に依頼し、調整作業での図書館職員の負担を減らし、職員が実務の準備や当日の対応等へ集中できる環境を整えていた。その他の機関については、指導教員や応募者本人から担当者等へメールで直接打診がある場合が主であった。インターンの選考は、書類審査のみで決定する場合がほとんどだが、香港大学アーカイヴズはインフォーマルではあ

でも必ず応募者本人と直接話す機会を設けていた。また、たとえば、香港大学図書館の保存・修復課などのように、注意を要する繊細な作業を伴う部署では、面接を行うこともあるようであった。

インターンは、香港大学の学生に限らず、他大学の学生や社会人、また、数は少ないものの、海外から参加する者と多岐にわたる。専攻分野は、香港大学図書館では図書館・情報管理学が大半を占めるが、各機関の収蔵資料等に応じて、香港大学アーカイヴズでは歴史学が多く、香港大学美術博物館では毎年1名、図書館・情報管理学の学生も受け入れているが、やはり美術を専攻するインターンを多く受け入れていた。

どの機関においても、「インターンが最も学びたいこと」に焦点を合わせて、できるだけ関連のある部署へ配属し、職員の一人として日常業務に加わってもらうという姿勢であった。香港大学図書館の分館では、複数の分館に短期間ごとに移動してもらうこともあり、必要以上に指導をすることなくインターン自身に任せられることができるようなプログラムの提案に努めていた。一方で、少なからず指導が必要な業務のある保存・修復課やアーカイヴズでは、インターンに一任できる作業が限られているため、ある程度、作業の難易度等を考慮して業務計画を立てなければならないようであった。また、アーカイヴズでは単純作業だけでなく、インターンが少しでも興味を持てるような作業も組み込むなど、作業バランスにも注意を払っていた。香港大学美術博物館では、指導という立場をとらずに、インターンと職員とが非常に密接な関係を築き、配属された部署だけでなく、他部署の職員との連携もとることができる環境を生み出していた。また、弘立書院では、修士課程の学生には研究の題材となるような業務を、ライブラリー・アシスタントを目指すインターンにはある程度実務的な業務を任せるといのように、学生の立場や目的により、はっきりと区別をして業務計画を立てていた。

インターンシップの評価は、多くの場合、受け入れ機関はインターンの所属大学等の要望に合わせて評価表や修了証を作成し、指導教員へ提出していた。美術博物館では、学内の学生以外のインターンについては基本的に成績評価を行わず、また、アーカイヴズでは、インターンシップ自体が未だ正式な形態をとっていないため、ごく稀に依頼があった場合を除き、ほとんど評価表を発行してはいなかった。

## 7. おわりに

受け入れ機関では、担当職員に限らず各部署の職員は皆、いつもどおりの日常業務を抱えながら、インターンの希望や素質を理解した上で、一人の同じ職員として受け入れ、各機関の規模や分野の特性、職員どうしの協力体制を活かして、インターンの将来の就職に役立つ現場の実務を最大限に提供していた。

今回の香港でのインターンシップを介した、大学における科目運営と各機関における受け入れの状況と実務内容に関する実地調査を通して、この科目に関わる大学の教職員、受け入れ先の担当職員にかかる作業の多さと煩雑さを改めて認識した。この問題に対しては、学習管理システムの利用やHKU SPACEへの委託など、大学、受け入れ機関の両方において、負担軽減の策もみられた。

そのような対策を講じていても、実際、ある受け入れ機関へのインタビューでは、「インターンシップはチャリティー・ワークだ」という声が聞こえてきた。しかし、その人物は「同時に、インターンシップは貴重な知識の交換の場になり、それは現場に反映される」とも言う。それは、大学の狙いどおり、インターンシップには、学生が大学で学ぶ理論と現場で用いられている方法との違いを把握できる場面があることを意味する。理論と実務は、理想と現実と言い換えられる向きもあるが、単にどちらか一方を重視すればよいというわけではなく、



おそらく、その双方と二つのギャップを理解した上で、さらに先を見据えたどちらにとっても応用的な手法を見出していくべきであると思われる。こうした考えに至って初めて、インターンシップはまさしく、学生にとっても受け入れ機関にとっても Win-Win のプログラムとなる。

このたびは、限られた大学、機関についてしか調査を行うことができなかったが、これを契機として、香港における図書館専門職養成をはじめとしたインターンシップについての調査を継続していきたい。

※本調査は、立教大学 2016 年度学部管轄予算を得て行われた、学校・社会教育講座司書課程「図書館実習のあり方検討プロジェクト」の一環で実施されたものである。

- 
- 1) 学位プログラムの他は、免許状レベル (Diploma Level)、修了証書レベル (Certificate Level)、短期コース (Short Courses) に分かれている。Hong Kong Library Association, “Education / Awards”, <http://www.hkla.org/content/blogcategory/55/80/lang,english/>, (accessed 2017-03-29).
  - 2) この学士プログラムは、副学士号の取得者 (Sub-degree Holders) が受講できるもので、2年で学士号が取得できるカリキュラムとなっている。Faculty of Education, The University of Hong Kong, Bachelor of Science in Information Management, “Curriculum Structure”, <http://web.edu.hku.hk/programme/bsim/curriculum>, (accessed 2017-03-29).
  - 3) これらはともに、英国図書館・情報専門家協会 (Chartered Institute of Library and Information Professionals (CILIP)) に認定されたプログラムである。Faculty of Education, The University of Hong Kong, Bachelor of Science in Information Management, “Programme Overview and Aims”, <http://web.edu.hku.hk/programme/bsim>, (accessed 2017-03-29); Master of Science in Library and Information Management, “Programme Overview and Aims”, <http://web.edu.hku.hk/programme/mlim>, (accessed 2017-03-29).
  - 4) Chiu 講師によれば、主な修士課程学生の受け入れ先は、本調査実施施設以外には、Flysheets Information Services Co. Ltd. (香港) や Hyweb Technology Co. Ltd. (台湾) といった情報・技術関連企業、また、香港シヨパン協会 (The Chopin Society of Hong Kong) や香港浸会大学 (The Hong Kong Baptist University)、台湾の国立公共資訊図書館 (National Library of Public Information) や国立清華大学図書館 (National Tsing Hua University Library)、カナダのブリティッシュ・コロンビア大学などがある。
  - 5) 香港大学では、全学的に Moodle を採用し、学習管理に役立てている。HKU moodle, <http://moodle.hku.hk>, (accessed 2017-03-29).
  - 6) The University of Hong Kong, Teaching and Learning, “Curriculum Reform: 4-Year Undergraduate Curriculum”, <http://tl.hku.hk/reform/>, (accessed 2017-03-29).
  - 7) 香港大学專業進修学院 (HKU SPACE) については、以下を参照。HKU SPACE (HKU School of Professional and Continuing Education), <http://hkuspace.hku.hk>, (accessed 2017-03-28).

- <sup>8)</sup> Stacy Lee 氏へのインタビューと香港大学アーカイヴズの下記ウェブサイトによる。University Archives, “About Us”, <http://www.uarchive.hku.hk/index.php/about-us/>, (accessed 2017-03-28).
- <sup>9)</sup> この建物の前身は、1932 年に中国語の書籍専門の図書館として設立された馮平山図書館であった。University Museum and Art Gallery, The University of Hong Kong, About Us, “History”, [http://www.umag.hku.hk/en/about\\_us.php?id=83156](http://www.umag.hku.hk/en/about_us.php?id=83156), (accessed 2017-03-29).
- <sup>10)</sup> スタッフは、Ip 氏を含めた 3 名の司書教諭と 4 名のライブラリー・アシスタント、そして、10 名の保護者による配架ボランティアからなる。また、Ip 氏以外の 2 人の司書教諭はそれぞれ、英語担当、普通話担当となっている。
- <sup>11)</sup> Ip 氏によれば、国際バカロレア資格を取得できる中學部課程では、小學部課程と反対で、英語と普通話の図書の割合は 7 : 3 になる。